



Title	第5号発刊に寄せて
Author(s)	佐々木, 倫子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2009, 5, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第5号発刊に寄せて

『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第5号をお届けします。「5」という数字はひと区切りのように思え、ここまで続いたことを素直にうれしく感じます。本号の特集は「バイリンガル、バイリテラシーを育てるために その2」となっています。2008年8月に持たれた夏の年次大会のテーマにも連動しており、本誌への応募論文を査読した結果、夏の年次大会で発表のあった2本が掲載されることになりました。

論文1のバトラー後藤裕子さんの「日本語学習児童生徒教育への提案 ―アメリカ合衆国の経験を踏まえて―」は、移民大国であるアメリカ合衆国の経験から日本が良くも悪しくも学べる点が多々あることを強く感じさせるものです。論文中の「アメリカ」を「日本」に置き換えれば、日本語を母語とする子と母語としない子が混在する教室、母語としない子のうちのかなりが日本生まれであること、家庭環境の整備や人脈・人間関係に関する資本の大切さなど、多くが重なります。日米間だけでなく、グローバル化が進む中で多数の国・地域に重なると言うべきでしょう。

論文2の柳美佐さんの「在日朝鮮学校における小学1年生へのL2 朝鮮語指導の特徴」は、朝鮮学校を扱うものです。日本における最大の継承語教育というテーマでは、言語政策のあり方を問うといったマクロ・レベルから、教室内の目の前の子供たちとのやりとりの分析のようなミクロ・レベルのものまで、多様な研究が存在し得るでしょう。本研究では、継承語教育の教授法を追究する目的から、ある朝鮮学校のカリキュラム、教材、教室内のやりとり、教師による指導などが記述・分析されています。ここに見られる教育の姿もまた、多くの地域で重なるものでしょう。

次に掲載されている書評は、本研究会が2007年から始めた、専門書読書会の第2弾です。それぞれの生徒が自分の母語を使って教育が受けられる多言語学校を、グローバル化する世界の中でどう実現していくか、現実の厳しさも含めて、さまざまなケースが紹介され論じられています。読書会がそれなりの数の会員の参加を得たことは、このテーマの重要性を示しています。公教育という、いわば、共通のアイデンティティー、共通の言語を作り上げる役割を担わされている場は、移動する子どもたちを前にして、多くの課題に向き合うことになります。私たちがすべきことは、まず、早急な批判や思い込みを避けて、学校で何が起きているかを注意深く複眼的に記述・分析し、教育的介入をはじめとする対応を考えていくことでしょう。

そこで、注目していただきたいのは本誌の研究会の記録です。例えば、第20・21回のリサーチメソッドの学習会ですが、研究テーマを持っていたとしても自分の研究手法や調査項目などに、他の研究者の目が欲しいという方々を対象としています。各人の研究計画を出発点に、その調査手法や妥当性を丁寧に検討し、考えを出し合う会を目指しています。このように様々な研究会を持つ中で、教育現場への還元ができることを目指しています。

本号の編集・発刊の責任は、真嶋潤子・清田淳子のふたりの企画担当理事が担いました。2003年の本研究会発足のときの役員は、「発起人」と呼ばれた4人でした。2006年には第2段階として、企画担当理事とアドバイザーを加えた体制へと拡大、充実しました。そして、本号ではその時加わった企画担当理事が中心となって編集作業を進めました。2006年の第3号発刊時は会員数が250名を少し上回った程度でしたが、2009年2月現在、会員数は412名となりました。研究会がさらに一歩前進したことを感じます。皆様とともに、ゆっくりと、しかし、着実に歩みを進めたいと思います。人的リソースも財政的リソースも限られてはいますが、次世代の子供たちの言語的・文化的豊かさを願ったとき、この会ができること、すべきことは多数あります。本書を手にした方の中から、活動の輪に積極的に加わって下さる方が多数出現することを願っています。

母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会 事務局担当理事

佐々木 倫子

2009年3月